

## 詞源研究会 編著

## 宋代の詞論——張炎『詞源』

〈中国書店・二〇〇四年三月〉

中国では詩詞という呼称は一般的であるが、日本では、詩が漢詩・唐詩として広く知られるのに対して、詞を知る人は少ない。書名をみて「詩論」の誤植だと思う人もあるのではないだろうか。詞は唐の時代の民間歌謡にはじまる歌辞文芸で、宋朝では洗練を加え、詩よりも高雅な韻文形式だと認識されるに至った。しかし宋王朝の滅亡と呼応するように急速に衰退し忘れられ、音楽を失った詞が韻文の一種として復興したのは清朝以後のことである。

副題の張炎は宋滅亡後元王朝に仕官しなかった遺民と呼ばれる一群の人々の一人であり、『詞源』は張炎晩年の著作と言われる。失われた祖国と失われつつある詞を愛惜するかのよう、実作者としても高い評価を受ける彼の、学識を傾けた文芸論が語られている。

本書は、『詞源』巻下の訳注である。

なぜ巻下か。巻上の音楽論は詞が音楽を失ったために後世に直接的には影響しなかったのに対して、歌辞論である巻下は韻文論として時代と文体を越えて読まれたからである。その篇目は「序・音譜・拍眼・製曲・句法・字面・虚字・清空・意趣・用事・詠物・節序・賦情・離情・令曲・雜論・作詞五要」。訳注とはなにか。ひとつひとつの術語に日本語訳を与え、その言葉が有する背景を記す。だから、読みやすいとは言えない。現在の出版界の流れに逆らうような本である。しかし、文献のデータベース化の目覚しい進展のなか、検索は簡単になったがそれを研究の成果にすることは必ずしも成功していると言えない現在、「検索の後」のあり方のひとつのモデルといえるかもしれない。本書の注は、詞論・詩論・文論などの文学論のほか、人物評・書論・画論といった文芸批評にも目配りし、中国芸術論の総合的な俯瞰を試みている。それによって知識人の精神世界の

構成を窺おうとするものである。なお、

本書には諸本異同表、引用詞の日本における訳詞の所在など、四種の付録がつけられている。それらもまた詞を研究するにあたって有用である。若干の訂正を記す。一頁「周易」↓「禮記」、三五頁「月禮」↓「月令」、一二三頁「戊角」↓「戌角」、一八九頁「長戌客」↓「長戌客」、三〇九頁「夢梁錄」↓「夢梁錄」。最後に最近二〇〇年間に出版された詞に関する書籍を挙げるので参照されたい。今後は本書を基礎として、当該分野の発展が望まれる。(松尾肇子)

村上哲見『宋詞の世界』大修館書店 あ

じあブックス、二〇〇三。

中田勇次郎『説詞叢考』創文社、一九

九八。

中田勇次郎『歴代名詞選』集英社 漢詩

選、一九九七。

字野直人『中国古典詩歌の手法と言語

——柳永を中心として』研文出版、

一九九一。

中原健二他『宋代詩詞』角川書店 鑑賞

中国の古典、一九八八。

佐藤保『宋代詞集』学習研究社 中国の

古典、一九八六。